

Y-PAC journal vol.6 平凡なるもの

Text by eiichiro owada

東京中央郵便局（1931）は、誰が作ったのかわからないくらい真面目なものと、ブルーノ・タウトが絶賛した建築である。この柱と梁以外は全て開口部、「骨でない所に肉はない」という単純明快な建築を設計したのは、当時、逓信省で多くの郵便局の建設に関わった吉田鉄郎（1894-1956）である。

吉田鉄郎の建築は、「建築家が自我を封印し、人々の生活を第一に考え、合理的で簡単明快なモダニズム建築」である。モダニズム建築は西洋において、歴史主義、権威主義からの脱却がひとつの目的であったが、日本においては、日本古来の伝統と根底で共通するものであると指摘し、日本におけるモダニズム建築の確立を果たしたのである。

そして完成から77年目を迎えた東京中央郵便局は、郵政民営化に伴い、建て替え計画が持ち上がった。民間企業として、不動産事業を新たな収入源と位置づけ、東京駅前の一等地にあるこの中央郵便局を超高層化するのである。現在中央郵便局の保存をめぐり、その価値が問い直されている。

先日行われた建築夜楽校において、グローバル社会における「建築的思考の可能性」を模索すべく、タワーマンションについての様々な議論がなされた。タワーマンションとは、言わば、現代資本主義社会における、経済的合理性を追求した建築またはシステムである。タワーマンションや超高層ビルが次々と建設される現在の状況において、それに関わる建築家は、一体何ができるのか？という問さえ意味を成さないという。しかしそうして建設されたものは、ルートヴィヒ・ヒルベルザイマーの「超高層都市」計画のような、本質を忘れ、行過ぎたモダニズム建築と重なる、というよりもただ単にその延長であるのかも知れない。それに対し、作家性を主張した強い建築を作ろうとする姿勢は、ポストモダンのような、新たな建築を予感させるが、ささやかな抵抗にしかならないように感じる。

しかしそのどちらでもない可能性を吉田鉄郎の建築には、感じることはできないのではないだろうか。東京中央郵便局の保存をめぐる問題と、これからの建築の可能性をめぐる議論は、全く別の話ではないように感じた。

東京中央郵便局の保存問題に一石を投じるべく、富山テレビが、建築家吉田鉄郎の軌跡を辿るドキュメンタリー番組を放映した。その最後に、鉄郎は死の前日に、「日本中に平凡な建築をいっぱい建てましたよ。」と語った。

鉄郎の建築やその精神は日本中に普及し、平凡なものへとなっていった。新たな合理的の発見と普及を果たした、吉田鉄郎だからこそ言える言葉であったと思う。

October 1, 2008